



「電線と月食」

松戸市在住の大学の先生撮影です。通常、天体写真に人工物が入るのはNGなのですが、私はそういうのも好きです。生活感のような感じます。写真によっては、天体の地平高度もわかって良いのです。



「電柱と月食」

横浜在住の理科の先生です。これも傑作です。電柱の存在感がすばらしい。電柱好きの宮沢賢治なら、この光景を見て、すばらしい詩作をしたいと思います。



「新しいスマホで撮りました」

東京の大学の先生の作品です。新しく買ったスマホで撮ったそうです。もうスマホでここまで撮れるなら、もうデジタル一眼レフも、赤道儀も必要ないような気がします。皆既月食中にもかかわらず、月の表面の地形がはっきりわかるのがスバラシイ。逆さになったウサギさんがちゃんと見えますね。



「キラっとした月食」

東京の出版社の方の作品です。月の左上(東側)だけがキラッと光っています。皆既が終了した直後でしょう。これもスマホの作品です。右上の流星のようなものは、月食の明部がつくった「ゴースト」です。スマホのカメラは薄い機体に無理にレンズを埋め込んでいるので、このような現象がよく写りこみます。



「半月型にはならない月食」

奈良の友人が撮影したものです。通常の朔望（月の満ち欠け）では、球体（正確には球体に近い形状）である月に、地球からの見かけ上、360度の全方位から光が当たって、さまざまな月相を形成します。しかし月食はちがいます。地球の影は円弧の一部なので、絶対に「半月型」にはならないのです。



「火星か?! いや月です!」

文京区在住の卒業生の撮影です。一瞬、望遠鏡で撮影した火星に見えました。火星がオレンジ色に見えるのは、地表（正確には火星表）が本当にオレンジ色だからです。しかし皆既月食中の月がオレンジ色に見えるのは、オレンジ色の光が当たっているからです。いや、これもすばらしい写真ですね。



「ターコイズフリンジ」

これも同じ方の撮影です。皆既月食では、皆既が始まる寸前と、皆既が終わった直後の数分間、明暗境界線付近に「青い帯」が出現することがあります。これを「ターコイズフリンジ」といいます。「トルコ石の縁かざり」といった意味です。ぶれてはいますが、その色が素晴らしい写真です!



「立体感のある月」

これも同じ卒業生の作品です。通常の満月はあまり立体感がありません。月の真正面から太陽光が当たっているからです。しかし、月食中の月はなぜか立体的に見えます。普段の月とちがって、光の当たり方の強弱がグラデーションになっているからです。虚空に浮かぶ美しい月の姿を、見事にとらえています。